

【報告】平成28年度「オーサービジット」実施

小 泉 尚 子 (国 語 科)

1. はじめに

2017年2月16日、筑波大学教授の土井隆義先生（社会・国際学群 社会学類／人文社会科学研究科 国際公共政策専攻）にお越し頂き、著書『つながりを煽られる子どもたち——ネット依存といじめ問題を考える』（岩波ブックレット、2014.6）の読書会を開いていただきました。

この読書会は、筑波大学と河合塾運営「みらいぶプラス」（本から出逢う学問選びサイト<https://www.milive-plus.net/>）の連携企画「学問本オーサービジット」に応募した結果、実施校の一つとして本校を選んでいただき実現したものです。

2. 「オーサービジット」参加生徒募集から実施まで

(1) 実施に至るまで

「学問本オーサービジット」は、筑波大学人文社会系社会連携推進室と河合塾「本と学問がひらく未来『みらいぶプラス』」サイト（高校生向けのサイト）が協力し実施・運営している事業です。本の著者(オーサー)が学校へ訪問(ビジット)し、読者と自由に語り合うという取り組みで、オーサーからの一方的な「出前授業」という形式ではなく、オーサーと読者との間で双方向的に意見を交わす場を作るという企画です。

2016年11月に本企画を知り、この企画を本校の読書推進活動に生かせないかと思い応募、12月に採用校に選ばれたという通知をいただきました。土井先生の訪問日も決まり、1年生の3学期課題図書にテキストとなる『つな

がりを煽られる子どもたち』を入れ、その後参加生徒を募りました。「課題図書著者が学校に来てくれる」という企画に魅力を感じた25名（男子12名、女子13名）の生徒が集まり、放課後、本校大会議室にて読書会を開くに至りました。

開催前に、参加生徒はテキストを読んでおくだけでなく、土井先生の文章（『キャラ化する/される子どもたち』より抜粋）が出題された2016年度センター入試現代文の問題も解いておくよう指示しました。出題文はテキストの内容と重なるところが多く、テキストの内容理解を助けたと思います。

(2) 土井先生のお話の内容

双方向的に自由に意見を交わす、とは言っても初めはどの生徒も緊張していました。そんな生徒の緊張をほぐすかのように、先生は優しく「指名はしないから、自分から発言しなさい。どんな発言でもいいから。それが、大学での学びに繋がる方式です」と主体的な参加を促してくださいました。

また、「最初はこちらから話すので」とスライドを用いながら、本の中にあるグラフの詳しい説明や本に書いてあることの社会背景の解説、本に書ききれなかったご自身の思い等をお話し下さいました。先生のお話は以下のような内容でした。



- ・最近の親子関係は変化してきている。縦の関係ではなく、フラットな関係の親子が増えてきた。ネット環境発達の他には社会の変化があまりなかったため、親子間の価値観のギャップがなくなってきているためである。
- ・親以外の他者と付き合うときも、自分と同じ価値観の人とばかり付き合う傾向が多くなっている。特に若者は、友だちの範囲が狭くなっていき、「イツメン(いつものメンバー)」から抜け出せなくなる傾向にある。
- ・インターネットが普及した当初は、家庭・学校・塾の閉じられた空間から抜け出すことができ、新しい世界の人とつながれる自由な装置という位置づけだった。しかし現在は、同質な情報のみを得、限られたメンバーとしか交流しないとといった、閉じた関係をいっそう強化する道具として利用されている。
- ・閉じている世界の方が、いじめが起きやすい。SNSはすこぶる人間関係が閉じている世界である。だからネットいじめは頻繁に起こりやすいのだ。
- ・若い世代は貧困率が上がっているが、生活満足度は上がっている。限られたメンバーとのつきあいやネットの発達によって、行動範囲や視野が狭くなり、他者と自分を比較することも減ったので、期待値が低くなったからだと考えられる。期待値が低いほど、満足度は高くなるのだ。
- ・現代の社会のあり方は、混乱や模索の時期を経て確立した「成熟社会」すなわち持続可能な社会、といったあり方である。つまり、社会を構成する人々は一様に「足るを知るメンタリティ」を備えているのだ。今の生活に不満を持つ人は少ないというデータが出ているが、それは、あらゆる世代の人々（特に若者）の期待値が低く、人々の生活圈および価値観が内閉化している傾向にあるためである。
- ・内閉化の傾向は他者とのつながり方にも表れている。若者は特にいつも同じ決まったメンバー、いわゆる「イツメン」とだけ付き合う傾向が近年顕著に見られる。しかし、「イツメン」とだけ付き合っていると、安定感を得られる反面、常に想定内の反応を得るのみで自分の世界は閉じていく一方だ。すなわち、‘自分の知っている自分’にしか出会えないのだ。自分の世界は、

自分とは全く異質な他者と付き合うことでしか広げることができない。同質な他者との安定したつながりだけで満足するのではなく、異質な他者との開かれたつながりも持とうとすることが大切である。

- ・現代の人々の内閉化したつながりを築こうとする振る舞いは、グローバル化と言いながらナショナリズムを強化する国家間の関係の構築方法にも当てはまっている。このように、一つの捉え方を用いて物事を見ると、様々な現象をも説明できる。

(3) 参加生徒から挙げられた質問やディスカッションの話題

先生のお話の後、生徒からは以下のような質問や感想が出て、それぞれの話題についてディスカッションを行いました。

- ・本の中にあった「友だち親子」とはどのような関係なのか。どれほどの人が「友だち親子」に共感しているのだろうか。
- ・自分自身の親子関係は縦（従来の親子関係のような上下関係）か横（友だち関係）のどちらと言えるだろうか。
- ・「ネットいじめ」とはどのような現象を言うのか。何ををもって「ネットいじめ」と言うのだろうか。
- ・LINEはSNSに入るか。TwitterとLINEでは、どちらが「ネットいじめ」の現象が起こりやすいだろうか。また、どちらが自分のキャラを自由に出せるだろうか。
- ・LINEの「既読無視」は、「ネットいじめ」に分類されるか。「既読無視」をされた方が気にしなければ「いじめ」ではなく、気にすれば「いじめ」ということになるのか。また、「既読無視」の捉え方に男女差があるか。
- ・「最近の子どもたちは期待値が低い傾向にある」というお話だったが、自分達は（たとえば一番身近な例として、親の社会的な成功を見ているのに）なぜ希望を持ってないのだろうか。
- ・現代社会では期待が持てない、という情報ばかりが目に入り、身近な成功例

を意識できていないのではないだろうか。



(4) 参加生徒の感想

参加生徒は企画終了後に様々な感想を寄せてきました。土井先生と意見を交わすことで、日々の人間関係やSNSとのつきあい方を改めて振り返ることができ、また、社会学から日常の事象を捉えることに関心を抱くようになったようです。さらに、土井先生が話されていた「期待値が低いから満足度が高いのが今の若者の傾向である」という話に自分の生き方を照らし合わせ、思いを巡らせた生徒もいたようです。以下、彼らの感想から抜粋します。

- 本を読むことの面白さ、大切さを噛み締めることができた。納得することしかなくて、先生の話が多面的に聞けなくて悔しかった。(男子)
- 自分と同質な人・異質な人の両方と関わりを持ち、視野を広くすることが大切だと思った。(男子)
- 自分は割と本を読む方だし、多くの転校も経験して色々な人と出会って、決して視野は狭くない方だと思っていたが、その考え自体が"狭い"ものだと気付いた。(男子)
- このままスマートフォンが進化して行って、有能さが上がる中で私はどのように行動するべきか考えていきたいと思いました。また、たくさんのこ

とを経験して、今よりも自分の世界を広げ、物事をもっとたくさんの方
で見えられるようになりたいと思いました。(女子)

○最近の若者の期待値が低いと聞き、自分もそうであると認識しながらも、
「このままでいいや」という現状維持を求めている。恐らくこう
考える若者が他にも大勢いると考えられるので、もっと根本的な解決法が
ないものかと思った。(男子)

○自分はこの本を読んで思ったことが色々あったが、他の参加者もまた一人
一人意見を持っていて共感できるどころ、全く違う見方をしているところ
がたくさんあって、自分の考えが広がった。「ネット社会でいじめがおき
てしまう時代」ではなく、「ネットをうまく理解し、役に立てることの出
来る時代」に変えていくことが大切だと思った。(女子)

○自分と同じ立場である人しか見ず、自分と違う立場の人を見ないという話
にとても共感しました。成功例ではなく失敗例しか見ていないという言葉
に納得することができました。家庭環境が良いと学力が上がるということ
を知りとても驚きました。(男子)

○格差の再生産についての話が印象に残っている。親の収入や家庭環境の差
が子供の学力に関係してくることに驚いた。収入が少ない家庭の子供はい
くら勉強しても収入が多い家族の子供に学力が及ばないという結果は衝撃
的だった。(女子)

○現代の人々は偏った情報ばかり取り入れてしまい、自信が持てない傾向に
あることが分かった。私自身も、自分がこのままでいいやと満足してしま
い、悔しい思いをあまりしていない気がする。もちろん、思うようにいか
ず納得いかないこともあるが、全てのことでそういった経験をしたわけ
ではない。自分には無理だと思って諦めるよりも、やってみてどうなるか、
自分の力を試してみた方がいいのではないかと思った。(女子)

○今までSNSとは多様な人間が繋がることのできるものだと考えていた。し
かし、現在のSNSの使われ方は全く逆で、仲間内・知り合いだけで繋がる

装置と変化してきた。SNSは使い方によって自分を閉じた世界に置くこともできるが、新たな情報を求めれば視野を広げることもできる。SNS利用者は改めて、自分の利用方法を見つめ直すとういと感じた。(女子)

○SNSが入ってから、人々の友達とのつきあい方に変化が出てきたなと思った。SNSの登場によるメリットもあるが、土井先生は社会学の観点から、デメリットに着目されていた。スマホは実際に、つながる世界を広げはしたものの、人々が自らその世界を狭めていることには驚いてしまう。スマートフォンはつながり依存を過剰にさせる機械なので、使い方に気をつけたい。(男子)

○私が一番印象に残っている話は、「生活圏の内閉化」です。今、LINEなど「閉じた」ツールが使われることが増え、人と出会う場所が減ってきています。スマホの有能さが上がってきているからこそ流動化から分断化・同質化へ進んでいるのだそうです。また「生活圏の内閉化」が進むことで、視野狭窄になり、期待値が下がってきているそうです。私もスマホを一日に使うことが多く、ほとんどがLINEなので、これからはLINEに依存するのではなく、人間関係を広げていきたいと思います。(女子)

○先生とのお話で一番ためになったことはネットいじめである。自分は、少なくとも加害者になったことはないの、(被害は僕が気付いていないだけかもしれない) 実態の理解はできていなかった。しかし、仲の良い人同士の内閉的な空間で人の悪口を言っているという実態を知り、とても恐ろしく感じた。だから、人に改善して欲しい点はしっかりとコミュニケーションを取って言うことが大切だと思った。(男子)

○私はオーサーの話聞いて、lineやtwitterのいじめはとても身近なことなので、自分も気をつけたいと思った。今回話を聞いて、私が入っているlineグループでも既読無視をされている人を見たことが何回もあり、今までは私も無視していたが、自分が返信することで、既読無視をされた人が「いじめられた」と感じなくなるのではないだろうかと思った。誰か一人

が勇気を出すことによって助けられることもたくさんあるかもしれないと感じた。(女子)

○オーサーの話から、自分や世間を見る新しいものさしを得たような気がします。心配や不安、悔しさやいらだちは確かにない方が楽しいし、充実している気もしますが、そのようなマイナスな気持ちは期待の裏返しなんだと思えるようになりました。その気持ちが全くなくなってしまったら、それは何にも期待せず、期待ができないということは頑張れるもの・打ち込めるものもなく、なんとなく日々を過ごすようになってしまうかもしれません。私は部活が大好きですが、頑張りたい分、いらだちや不安もあります。しかし、この気持ちをプラスのよい方向に変えて頑張りたいです。私はまだ明確な目標はありませんが、何事にもチャレンジして視野を広げ、刺激的で楽しい人生を送りたいです。ありがとうございました。(女子)

○今回は、社会の中のSNSや人間関係などを様々なデータから分析して見るという、自分はしたことのない経験をすることができました。私は親とは、「友だち親子」以上の関係だと思えます。友達には言えないことも母には言うことができるからです。友達だと、SNSなどでつぶやかれ、いじめになってしまったりするのではないかと不安になってしまうからです。実際、私も「キャラ」と日々闘っています。「それは、私のキャラじゃない」とよく言っているなと思うからです。一度キャラを作ってしまうとなかなか抜け出すことができないのです。自分が抜け出したいのかも、最近によく分かりません。私は、小学校の頃に2択クイズをしました。それは「1人の親友or100人の友達」というものです。これは、親友と友達という信頼度の差を測るのだと思いました。小学生の頃は迷わず100人の友達を選んでいました。それは「たくさんいた方が楽しいから」という単純な理由だったと思えます。でも今は、「1人の親友」をとるかもしれません。これは今回、オーサーが言っていたように、人間関係が閉じられていることに関係しているように思います。大人は「やってみればいい」と簡単に言いま

すが、そんな簡単なことではないと私は思います。なので、まずはたくさん悩んでみたいと思います。今回は、たくさんの貴重なお話をありがとうございました。(女子)

(5) 読売中高生新聞掲載

本会の様子を、読売中高生新聞が2017年5月12日付の記事にしてくださりました。

「ネットいじめ なぜ 研究者と白熱議論」(11面掲載)



3. オーサービジットを終えて

本企画により、生徒はより興味を持って社会学とはどのような学問なのかということを知ることができたと思います。特に自分達に馴染みが深いSNSとのつきあいや「イツメン」現象の話題は強く印象に残ったようで、その後現代文の授業で小論を書く際にも、土井先生の言葉を借りて論じようとしている場面が多々見られました。このときの1年生が3年生になろうとしている今、「卒業論文のテーマに『イツメン』を選びたい」という生徒も散見されています。土井先生との語りいによって、生徒達と本との距離が縮まったこと、また、一つのものを見方を獲得し、それを様々な場面で援用したり深く追究してみたくなったりした生徒が出てきたことは大変喜ばしい成果だったと言えます。

本校国語科では、3年間に100冊読破を目指すための「課題図書制度」を設け、年間に30数冊の読書を課しています。課題図書の選定にあたり、評論や理論書も広く取り入れたいところなのですが、生徒に「堅苦しくて読みにくい」と言われてしまうため、小説に比べ冊数は少なくなってしまうのが現状です。評論や理論書を、気軽にワクワクしながら読ませることは今後の課題の一つとなっています。

今回オーサービジットを企画していただき、このような機会は生徒の評論や理論書への苦手意識をなくす有効な手段であると実感しました。今後もこのような機会を積極的に設け、日常の事象を分析的・学問的に捉える面白さを生徒に味わわせたいと思います。また、新書や学問本を読みたくなるような知的欲求を育てていきたいと思っています。

付記

*本企画は、「みらいぶプラス」サイトでも報告してくださっています。

「学問本オーサービジット（筑波大学協力）インターネットの普及が閉じた関係を強化。視野の狭さやいじめにつながる～『つながりを煽られる子どもたち』を読んで～アイデンティティ論・土井隆義先生＋中央大学杉並高校」

<https://www.milive-plus.net/authorvisit2016report/05/>